

瀬戸内に建つ、400年の歴史

寺とも
かわら版



徳成寺
とく じょう じ

第225号 2025年9月 発行責任者／住職・大山健児 坊守・大山ひとみ

お坊さんの処方箋・戦後80年

いつもありがとうございます。

住職の大山です。8月が終わりました。今年も、戦後80年の節目です。

徳成寺も、80年前高松空襲の憂き目に会い、焼失してしまいました。戦争の被害だけを語るつもりはありません。戦時中は、兵隊さんが戦死すると、軍人院号を授け名譽の戦士であるとたたえ、武器に再利用するために仏具も供出しました。従つて戦前からの仏具は一つも残っていません。

朝のドラマ「あんぱん」で、主人公が出征する場面、主人公の母親は「生きて帰つて来なさい」と絶叫しますが、隣近所の人には「頑張つてお国のために戦つて」と激励します。その隣近所の人に混じつて、衣を着たお坊さんも、同じく激励したのでした。この場面が象徴するように戦時中、戦線の拡大と共に、朝鮮半島や中国大陸に数々の別院や布教所を各宗派がこぞつて開設しています。

このように戦争に加担し、戦争に便乗して教線を拡大する試みを無

かつた事には出来ません。去る8月15日の朝日紙折々のことばに「戦争はその姿を現す随分前から始まっているも

命を生ききる

大山超世の耳を澄ませば

お世話になります、副住職です。お盆参りでお世話になったご門徒の皆様、ありがとうございました。

さて、先日はお世話になっている方のご親類が亡くなられたので通夜へ弔間に行きました。通夜の際の法話では故人さんは晩年、闘病生活を送っていたのですが、亡くなる寸前まで本を読んだり見舞い客と談笑したりされていたそうです。その事を住職さんは「命を生き切った」と表現されておりました。過去を悔やまず、未来に絶望せず、最後まで人間らしく生き抜いたその姿は命を全うしたと言う事でしよう。法話を聞いていつも思うのは当の私と言えどもどうだろうと言う事です。通夜での法話をする際に葬儀はこ

のです。おそらくは人々が口をつぐみ、物申すことをやめたときから」とあります。事実を事実としてはっきり伝え、口をつぐまない。この事一つを学ぶ80年にしたいですね。

れまでの世界から新しい世界に生まれ変わる儀式が勤まると言うお話をします。そんな話をする側であっても、忙しくなると日常に追われ、漫然とこなす日々になりがちで、命を生き切っていると言えるかと問われると首を縦に振れない私がいまです。弔問は故人を偲ぶと言う事は勿論ありますが、同時に自分自身の在り方を見つめ直す大事な機会です。出仕する事は多くても参列する機会は人並みなので、ありがたい機会だったと感じました。



お葬式のイメージ